

しものなり。紙は所々蟲喰み字も亦おぼろになりにしかど、書と共に諭し賜ひし師の御訓により我が小さき胸に響きし慈善てふ小琴の清き調は、今尚胸に新らしきを覺ゆるなり。凡世人の交際上其の身を持するところを見るに、徒に容色の美を計りて日も惟足らずとする者あり、大或は綺羅を装ひ流行を逐ひて多額の財を費すものあり。或は又、喋々たる辯舌を以て人の心を牽かんとするもあれど、いづれも皆根柢を忘れて枝葉に走りし方法なり。此等は一時人の目を惹くものあらん。されど、人格と人格との圓滿にして且つ永久なる交際は、一時外形上の美のみにて完全に行はるゝものにはあらず。即ち、容貌ならずとも、綺羅に身を裝はずとも、或は又、甘言口に多からずとも、其の人に對へば何となく氣高くしかも慕はしき懷かしみを感じする所以のものは、唯一の誠意即はなり。あゝ誠意、其の影の動くところ萬物歸來せざるなし。更に謂ふ、誠意は人格上斯くの如く光を添へ、處世上此の如く力を與ふるものなれども、尙此に切

望するところは、其の誠意の同情といふ外貌に流れ出でたる玉の如き美しく清き涙を、世の不幸の人の爲に惜まざらん事はなり。猛惡なる大罪人の刑場に臨んで落す涙にも尙、捨て難き美しい涙は實に千金の價なるべし。釋迦は如何。耶穌は如何。何千年後の今日、幾千萬の信徒が隨しに不幸不運に對して衷心より灑ぐ涙、あはれ其の一滴は實に千金の價なるべし。釋迦は如何。耶穌は如何。何千年後の今日、幾千萬の信徒が隨しに喜渴仰する所以は、即ち一切衆生の爲に、罪の子の爲に玉の涙、否、其の身さへ惜まざりしに因らずばあらず。彼のベヌタロツチは近代の國民教育の始祖として、吾等の忘るべからざる大教育家なり。然れども彼の傳記を見るに必ずしも博學なりしにもあらず又經驗の豊富なりしにあらず。唯彼には終始不變の誠意あり。殊に彼が不幸なる貧民或は孤兒に對して泣き出でし涙は、彼に偉大の力を與へ彼をして幾多の困難に打ち勝ち遂に一大教育家たらしめたりしなり。あゝ、いかにその涙の美しさや。あゝ、いかにその慈善事業の尊さや。傳へ聞く歐米文明

國にては慈善事業盛に行はれ、近時益々其の發展をはかり、以て、不幸の児の救濟を計れりと、ひどり我が國に於ては稀に其の設備なきにしもあらざれど、尙一般の思想の此の方面に傾く者多からざる故に、我が親愛なる同胞にして自ら救ふべからざる悲運に泣く者少からざるは、甚だ遺憾の極みなり。去年畏こくも聖上陛下より御内帑金百五拾萬圓を、慈善事業の基本にせよとて下し賜ひぬ。あゝ、聖旨斯の如く尊し。臣民として徒に長袖をつらねて花にうかるゝ事なく、時には思を不幸の人の上にめぐらすべきなり。人々が綺羅を装ひ花に遊ぶの日飢ゑて路傍に泣く兒もあらん。木枯荒ぶ寒夜、火桶かこみて歌舞の嘶に餘念なき時、枕となるべき子もなく、闇にさまよふ老人もあらむ。あはれ、世の富者よ、これらの人々の爲、親の爲に己が財の幾分をさきて、美しき涙と共に世の慈善事業に捧げんことを忘るべからず。

◎鏡

文科一部一年 安吉ます

それ目はよく物を見れどもかへりて己が面を見ざる故に、鏡をかりて寫し見る。智もこれと同じく人の悪しきことはよく知りわかれども、かへりて己が是非に惑ひ易き故に、道を鏡として己れを正す必要あるなり。然るに今日我が婦女子の状態を觀るに、多くは第一の條件を缺けり、見よ婦女子はよく鏡を見て、よく顔をおしぬぐひ、よく粉脂をぬる。されどその心の潔からむこと顔の如く、その心のこまやかなること脂の如きもの少し。よく紅粉をぬり、よく髪を櫛げづる。されどその心のあざやかならむこと顔の如く、その心のすぢわかれむこと髪の如きは稀なり。畢竟多くの婦女子はよく耻を知り、よく外見の美をきそへども、この重視すべき心に對しては何等向上の觀念なく、この靈妙なる人生に就て何等修飾の意識なく、唯空々漠々として歲月を過す。かかる人はあたら錦囊に塵埃を包

める者と謂ひつべく、公明正大なる鏡に對して恥づることなきを得ざらむ、夫れ容姿の美醜は天性なり。しかし美なりとても必ずしも健全なりと言ふべからず、醜なりとても必ずしも不健全なりと言ふべからず、且その美醜は妙齡の間のみにして、年老いては更に變りなかるべし。

これに反して、心の美醜は生涯の歴史なり、品性なり。更に子子孫孫末代までもに影響するものなり。されば婦人は面を照らす鏡をくる毎に、心を照らす鏡あることを忘るべからず。漢の蔡邕が女誠にも女子の化粧に思ひつゝけて、心の訓誠を述べたり。又古人も「心さへうつろふものをます鏡すがたのみとも思ひけるかな」とよまれたり。蓋し心の鏡とは何ぞや、他なし聖賢の教訓なり。更に刮目せば全社會のあらゆる活動は大なるレンズとして参考すべきこと多からむ。噫我等女子は朝に夕に物につき事にふれて鏡を有することを忘れず、時々折々照らし見ておのが心の塵をはらひ、鏡の如き美しき徳・鏡の如き明けき智を得、その名を萬世にのこし、

千載の下人の摸範たらむことを期すべきなり。さはいへかゝるおほけなき希望いつの世に果しえべきかと思へば、折しも傍にありつる鏡の面のみ見守られていと美しくもはた恥かしさにたへず。



歌 短

河崎なつ

先帝陛下を悼み奉りて
萬代も千代もまします我が君と國民こぞり仰ぎてありしを
青山のみはふりの殿美はしくなれりときくもかなしかりけり
道ゆくもふと忍ばるゝはるかなる都の方の今日のみはふり
みはふりの日ともなりけり國津御民ひびきしづめて夕暮に入る
白き幕打ちめぐらして造りぬるみはふりの殿さびしかりけり
二千里の北南あれ國民は都の方を今ぞをろがむ
天地のみかみ守りませ大君の大御車のいでましの道
一人かしこくもいまや御轎車いでまさむ千代田の城のかの御橋上
日の御旗月のみはたの搖られつゝゆくさま見ゆれ秋風の中
三百里北の國なる草山の原にぬかたれみたまをろがむ
さやさやと沈黙の街の夜を吹く初秋の風つめたしかなし
めとづれば赤坂あたりかしこも大みひつぎのゆきますが見ゆ
ここしへに都さかりて御轎車はかへり来まさすかなしからずや
御靈柩は鴉の湖紫にひらけしほとりみゆきますらむ
草山の草ふく風もほろほろとなく虫の音も悲しこの秋世の人々